

エドワード アワー ピアノ リサイタル

曲目解説

1972年12月4日(月)

P. M. 6 : 30

朝日講堂

エドワードアワー

1941年 ニューヨークに生れる

1951年 Aube Tzerko に師事

1961—1966年 ジュリアード音楽院にて

Madam Rosina Lhevime に師事

1967—1968年 フルブライト賞を受け、パリに留学、この頃より、世界各地にて、リサイタル開催

受賞

ショパン・コンクール (1956年 ワルシャワ)

ベートーヴェン・コンクール (1956年 ヴィエンナ)

チャイコフスキー・コンクール (1966年)

マーグリットニコロ・コンクール (第1位グランプリ受賞) (1967年 パリ)

ソナタ イ長調 K.331

モーツァルト

モーツァルト (1756~1791) の数多いピアノ曲の中でも、トルコ行進曲を持つこの作品は最も有名なものの一つであろう。

1777年9月、日増に上がる名声にもかかわらず、音楽に理解のないザルツブルグの大司教の元で、あまりバツとしない地位にありそをつかせたモーツァルトは、母を伴い、新しい旅旅に出かける事になった(所謂パルマンハイム旅行)。併し、各地で喝采を博したものの、当初の目的であった就職の件はうまく行かず、その上、旅先のパリでは母の急死という不幸に遭遇し(1778年7月)仕方なく再び帰国の途につく。(ザルツブルグ帰着は1779年1月)この間、モーツァルトは演奏活動の必要から7曲のピアノソナタを作曲しているが(K.309, 311はマンハイムで、残りK.310, 330, 331, 333はパリで)、このK.331が書き上げられたのは1778年夏(あるいは5月から7月の間)のことでありとされている。

ところが、一応ソナタとはなっているもの、この曲は正規の楽曲構成を持っていない。つまり第1楽章が速いソナタ形式ではなく変奏曲を成しており、第2楽章はトリオつきメヌエットで、所謂緩徐楽章ではない。併し、全体の拍整は良くとれており、流暢な美しさを持っているこの曲は、もっと気軽な、あるいはセレナードに近い様式を持った堅いソナタとでも解釈しておいた方が良いのかも知れない。

第1楽章はイ長調アンダンテ・グラチオーソの優美で単純な主題と、6つの変奏から成るが、この変奏曲形式というのは、当時愛好された形式であり(モーツァルトの作品の中にも数多い)彼の得意とした即興演奏にも便利な形式である。

第2楽章(メヌエット イ長調)は規模の大きなトリオ(中間部)つきのメヌエットで、強奏のユニゾンで始まる雄々しい主部と、手のこんだトリオは興味深い対照を成している。モーツァルトはマンハイムで新しい改良された所謂今日でいうピアノを見ているはずであるから、その当りを意識して書いたのかも知れない。

第3楽章(アレグレット イ短調)はアラ・トゥルカ(トルコ風)と記されていて、有名なトルコ行進曲である。長短調の交替、独特なエピソードに示されるエキゾチックなリズムや、日まぐるしい音の動き等はなかなかユーモラスにとんでいる。

エリザベス女王・コンクール
(1968年 ブリュッセル)

演奏:活動

1966年頃より、世界各地のコンサートで好評を得る。

1970年、アメリカ国内演奏旅行賞讃を集める。

1970年、12月ロスアンゼルスにおいて、オール・ベートーヴェン・リサイタルを開催「真実の崇高なベートーヴェンだった」と好評、オタワにおいて賞讃を得る。

1971年~2年 オーストリア・オーストラリア・メキシコ・フィリピン国際的に活躍、自宅に席を温める暇もない売り子である。

レコード

最初のレコーディングは、Pathe Marconi 東芝からショパンのプレリュード第24番作品28を録音、職業に熱狂的なブームを呼んだ。

マネージメント

アメリカにおける彼のマネージメントは、1969年よりヒューロックとなる。

夜のギヤスパール (Gaspard de la nuit)

ラベル

ラベル (1875~1973) という人はドビュッシーと並んでワグナー的なロマン主義を内面的に引っぱり込んだ所謂印象派に属し、同時にドビュッシー程耽溺はしなかった(というより出来なかった)ものの、その改革運動を創始し完成させた一人であり、この期のギヤスパールもそういった彼の改革的な手法の完成期に当る1908年に作曲されている。

印象主義というのは言ってみれば気分と雰囲気への陶醉であり、一見ばらばらに見える音形がお互いにイメージとして支え合い結び合っているというようなものである。このベルトラン(A. Bertrand 1807~1841)による同名の散文詩集の中の三編からのインスピレーションにより作曲された夜のギヤスパールにも、そのようなイメージの音化といったところが十分に見られる。

あでやかさと神秘さを秘めた水の精、簫々として止まない絞首台、そして珍妙な妖怪の跳梁するスカルボと、豊かな幻想的雰囲気は見事な対称をなして構成されており彼の作品中でも傑出したものの一つである。

曲中にはベルトランの詩文からそのまま音に翻訳したような楽節の推移と詩節の一致や音型が随所に見られ、楽譜にはその詩が記入されている。

水の精 Ondine “水の戯れ”等にも見られるラベルの卓越した水の幻影描写はここでも見事に生かされており、さざ波の秘やかな音がpppで始まり、やがてオンディーヌの甘美な囁きを思わせる旋律が浮んで来る。小波はその調べに乗っておしよせ、はたと止む。そこでは単旋律でささやくような印象的な音がよびかける。そしてそれは一度輝きを増しアルペジオになるがやがておさまりに消えて行く絞首台 Le Gibet “町の砦に響きわたる鐘の音”が陰にこもったような弱々しい旋律で全篇の影になっている。全ての旋律はこれに乗る越える事が出来ない。この曲の主旋律は最初に奏される断片的な旋律がもとになっている。

スカルボ Scarbo “月が御空に照る真夜中どき”に跳梁するきつない妖怪スカルボの動きがスケルツォ風に描写され、小刻みなトレモロの導入によって登場する。形式はソナタ形式で、4つの主題が出て来て、それが縦横に入り混れて展開する。やがて諧謔的な導入のトレモロが現れる。コードは鋭いスカルボの叫びが静まった後、「あつという間に消えて行った」らしく終る。

さん

田崎悦子

私の友人エドワード・アワーさんは、現代人にはまれな、あたたかい美しさをもった人間です。温和な繊細さ、又それを楽器の上で表わせる正確なコントロールを持つ彼はピアノの詩人です。彼の音楽は彼の想像と夢が音の世界で生き輝やいて現われたかのようで、聞いている私達はその世界に完全に誘いこまれてしまいます。彼の人と接音楽にする人は、一人一人、何か大切なものを与えられたような気持になるでしょう。

ショパン
前奏曲 (Präludium) というのは元来、管弦楽団員が指ならしに弾く小即興曲とか、歌手の調音の為のオルガンのそれを意味したものであったが、次第にフーガやパッサカリア等が付け加えられ、バッハの平均律のフーガやパッサカリアのような本格的なものになって行った。
この作品28の前奏曲集は1838~39年となっているが、正確なところは解っていない。この時期ショパン (1810~1849) はサンドと共にマジョルカ島へ転地療養に出かけているが、恐らくその大半を転地前に書き上げ、マジョルカ島ではそれ等の推敲と残りの幾曲かを書き上げたものであろうと考えられている。
この24曲のそれぞれは性格や形式を異にして断片的ではあるが、ハ長調からニ短調までを五度循環によりそれぞれ配置してあり、全体的には調和のとれた完全な形を持つ。従ってこの曲集は単独でなく全体を通して演奏される事が多い。
第1番 (ハ長調) 右手の親指と小指で重複して現れるオクターブの旋律が目まぐるしく転調され、激しくかつ病的なあわただしい性格を持っている。
第2番 (イ短調) 「非常に独創性を発揮した、絶望的な、神経をいらだたせる曲。不均齊な旋律」(ハネカー)が4度抜いた方を変えてくり返される。
第3番 (ト長調) 16分音符の躁急な伴奏の上に淡い旋律が右手でかなでられる。
第4番 (ホ短調) 全曲の中でも特に美しく憂鬱な曲で、ショパンの葬儀の祭にも演奏された。
第5番 (ニ長調) 曲頭のリズム的な動機が和声を変えて処理され絢爛たる響きを持つ。
第6番 (ロ短調) マジョルカ島で作曲され、構々しい単調な気分満ちている。
第7番 (イ長調) 小曲乍ら美しい。
第8番 (嬰へ短調) 美しく見事な和声変化を持つ。
第9番 (ホ短調) 大まかな構成だが演奏はなかなか難かしい。
第10番 (嬰ハ短調) 簡単な即興的な曲。
第11番 「あまり速く弾いてはいけない。曲の柔軟性や独創性が速すぎる進行とは一致しない」(コルトー)
第12番 (嬰ト短調) 堂々とした強奏な曲。ショパンの熱情。
第13番 (嬰へ長調) 閑寂で最も優美な旋律を持つ。
第14番 (変ホ短調)
第15番 (変ニ長調) 6番の発展したもののようにあり、「雨だれのプレリュード」として知られている。
第16番 (変ロ短調) 上昇楽行がコードで破壊される峻烈な曲で高い技巧を要す。
第17番 (変イ長調) メンデルスゾーンの無言歌に似た甘美な楽曲
第18番 (へ短調) 劇的な気風を湛えている。
第19番 (変ホ長調) のびのびとした優雅な旋律を持った好篇である。
第20番 (ハ短調) 葬送行進調を思わせる。
第21番 (変ロ長調) 独特な重い伴奏によって情緒的な甘美な旋律が流れて行く。
第22番 (ト短調) 技巧的で練習曲ですらある。
第23番 (へ短調) 前曲と対比的に優雅な繊細さを持ち、一般的にも良く知られている。
第24番 (ニ短調) この曲集最後を飾る堂々とした熱情を持つが、ロシア軍によるワルシャワ陥落の報に接して作られたもので、ポーランド人としての悲憤、慷慨を秘めている。

エドワード・アワーについて

岩崎 淑

エドワード・アワーを私が初めて知ったのは、ゼルキン、カザルス主宰のマルボロ音楽祭を訪れた1962年の夏である。渡米してまもなくの私が初めてアメリカの音楽家達の演奏を聴いた毎日は、名演ばかりで興奮に満ちていた。その室内楽のスクールで、すばらしく音楽的な、きらめくような音でピアノをひいていた若い人、それがエドワード・アワーであった。その優しい人柄を知った時、私達は、お互いの音楽的経験と理想を語り合う良き友達となった。私達はピアノを語り、人生を語り、ゼルキンを尊敬し、カザルスに驚き、ヴァーモントの白樺林を歩き、小鳥の声に耳をそばたてていた。

それから2年後ジュリアード音楽院に入学した私は、エドワードも又、ロジーナ・レヴィン教授のもとで、研鑽を続けている事を知った。彼がショパンコンクールを受け、初めて、アメリカ人としての入賞を果たした時の、ニューオータムスの歓喜の記事を忘れる事が出来ない。ショパンを弾くエドワードは特にすばらしいと私は思う。彼のせん細な神経と優しさ、音色に対するセンス、テクニクを感じさせないテクニクの磨かれ方などは、ショパンを弾いた時、特に輝くように思われる。彼がショパンコンクールの後に再びチャイコフスキーコンクールに挑戦した時も私はその課題曲を幾度となく聴かせて、もらった。私の感じたことを卒直にいい、彼も又私の勉強した曲について、いつも良くきいてくれた。ペダル・フレーズ、指使いなどについての適切な指示は、実に得る事が多かった。彼は教授としても実に秀れているのではないかと思う。音楽的な面でのこうした友人を持った事はジュリアードにおける最も大きい収穫の1つであった。

チャイコフスキーコンクール入賞以来、ヨーロッパへの留学を希望し、パリでペルミュテル氏に学んだエドワードは、更にロンドンコンクールを受け、遂に優勝、これも初のアメリカ人としての輝かしい優賞であった。イタリアのシエナでの再会、そしてニューヨークに行くたびに、新しいニュースを語り合い、励まし合っている親友、エドワードが、この度、来日のチャンスをもった事を知り、大変喜んでいて。彼こそ聴かれるべきピ

アニストである。彼のデリケートな精神の中に生まれる音楽性の高さは、力強く雄々しいアメリカ音楽界では、貴重なふん囲気をもったピアニストとして躍進をつづけ、認められている。エドワード・アワーの日本公演とマスタークラスの成功を心から祈るものである

新しいアメリカの

ピアニスト・タイプ

野村 光一

エドワード・アワーは、ショパン国際コンクールに入賞、1967年にロンドンティンパニーコンクールで1位という輝やかな成功を納めた。その後、母国のアメリカを中心に華々しい活動を行っているのは、周知のところだろう。わたしは、アワーの実演を聴いたことがない。ただし、最近レコードでショパンの「二十四の前奏曲」を弾いているのを聴いた。それによると、彼は、彼独特の特徴を発揮しているように思われるところがある。彼は、あまり大柄なタイプのピアニストではないようだ。そうはいくもの大抵のアメリカのピアニストの通例として、ドライなメカニクを身につけているのは確かかのようにである。だが、その反面、音楽家としても豊かな情調にも恵まれているらしい。したがってこの両面を結びつけるのに彼は、目下腐心しているかのように見受けられる。

聞くところによると、アワーは、室内楽演奏にも強い関心を寄せているという話だ。それだけ楽曲の構成に理解力を持っているだろう。それと同時にアメリカには、おしなべて、作品の演奏スタイルにヨーロッパの従前からの伝統をそのまま追われない傾向も現在若い人々の間にはあるので、そこでアワーの新進ピアニストとしての苦慮もあると思わずにいられない。ショパンでは、彼は遅い曲を普通の場合以上に目立ったテンポで弾いていた。それとともに、曲の構成の骨子とする音型や低音部の線をこれまた相当以上に強調していたところもあった。そのいちじるしい例は第9曲のホ長調グラーヴエなどである。畢竟、この知的でまた情動的なアメリカ人は、何か過去にとられわれないピアノ音楽の新しい領域を開拓しようとするかのようなものだ。そのことが、これもまた新しい未知の世界へ突入しようとしている日本のピアノ界に多くの示唆を与えるに相違ないと思う。わたしは、彼の来日は、有益だと思うのである。